

(要約版)

居酒屋における飲食と喫煙と発話の並行現象の分析

—喫煙習慣のある高齢者を対象に

助成研究者 中田 梓音 (国立民族学博物館)

1. 研究目的

喫煙は、休憩時や食後という区切りに多くみられる行動であるが、居酒屋においては飲食が完了しないうちに喫煙がおこなわれる光景をよく見る。また、飲食と会話(従業員やその場に居合わせた客などと)が並行しておこなわれることもしばしばある。この、発話と飲食そして喫煙という行為がどのように並行しておこなわれているのかに、本研究は注目した。とりわけ、喫煙習慣を持つ中高齢者を対象とし、飲食や会話のどのような場面で喫煙行動を始めるのかといった調査から、なんらかのパターンを抽出することを試みる。さらに、2020年の東京オリンピックに向けた喫煙場所の減少と、それに伴う加熱式たばこや電子たばこが急速に普及するなか、それらが紙巻たばこの代替品となる可能性を検討する。

2. 方法

(1) 飲食店で喫煙する喫煙者へのインタビューおよびアンケート

近畿圏(大阪、京都、滋賀)の飲食店(個人経営の喫煙可能な飲食店)7軒において、飲食店の責任者に研究内容に関する同意と調査の許可を得た。店内で喫煙する喫煙者(47名)に、個別にインタビューをおこなった。これらのうち、喫煙年数30年以上と回答した喫煙者で、録音および録画に協力の承諾を得た喫煙者(8名)を主な調査対象者とした。

(2) 実際の喫煙行動のデータ収集

客の来店時から店を出るまでの、喫煙のタイミング、その前後の発話や飲食の状況などを記録した。記録には、目視によるメモ記録とICレコーダーによる録音をおこない、店内状況により、撮影が可能な場合はiOS端末による動画の撮影をおこなった。その後、調査対象者には、紙巻たばこの代わりに加熱式たばこで過ごす実験観察をおこない、同様に記録・整理した。

3. 結果

調査対象者の飲食店滞在中の紙巻喫煙本数は平均9.6本で、飲食や会話の途中で点火され、各吸引の合間にも飲食や発話が入り、消火、また飲食や発話、点火を繰り返すパ

ターンとなっている。酒 1 杯や料理 1 皿の飲食が完了するタイミングや飲食物の種類に関係なく喫煙は始まり、飲食物や飲食の完了が契機となるものではない。発話に関しても、必ずしも会話の完了の後に喫煙がみられるわけではなく、喫煙を誘発あるいは示唆するような特定の発話はみられない。ただし、点火前の発話の場合、点火のタイミングに注目すると、発話の文章を言い切ってから点火をするというパターンがみられる。これにより、自身の発話が終了し、話者交替のタイミングとなるが、ほとんどの場合、話題転換が起きることはなく話題はそのまま維持される。この際、喫煙者が点火前の発話を点火後も繰り返す行為も話題の維持を促すものである。

喫煙の契機となる直前の飲食物および発話は、加熱式たばこの使用においても特に目立ったものはなかったが、1 本の使用が終了するまで飲食行動は観察されなかったため、紙巻たばこと比べて、喫煙行動を優先する、せざるをえない時間や重さに関する制限が明らかになった。

飲食店での紙たばこの嗜好品としての条件は、自分のタイミングで点火・消火ができること、口にくわえられる軽さであること、があげられる。加熱式たばこは、並行行動は可能ではあるが、本体が重く、点火・消火のタイミング調節が難しいことから、喫煙者は飲食や発話よりも喫煙に関わる操作を優先する傾向にある。こうしたことから、加熱式たばこはニコチン摂取を目的とした代替品であって、現時点では、居酒屋での嗜好品としての紙巻たばこの代替品とはいえない。